

平成22年 5月25日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19730416

研究課題名（和文） 情動が青年の友人関係に及ぼす影響

研究課題名（英文） Effect of affective traits on adolescent 's friendship

研究代表者

榎本 淳子 (ENOMOTO JUNKO)

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：50408952

研究成果の概要（和文）：本研究では、青年が持つ感情特性が友人関係にどのような影響を与えているのかについて検討した。一連の研究から(1) 曖昧な友人関係場面の解釈を求める調査において、解釈に影響を及ぼす感情特性は、肯定的感情特性よりもむしろ否定的感情特性であること、(2)また場面を解釈する際、否定的感情特性が低い場合、青年は友人に対して自ら状況を変えることが可能な積極的な解釈をすること、また逆に否定的感情特性が高い場合、被害的で主体性のない解釈をすることが示された。このことから感情特性が場面の解釈に大きく影響を与え、特に否定的な感情を持つ青年は、友人関係で生じた出来事を被害的に捉える傾向があり、友人関係の維持を困難にする可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：This research project examines the effect of affective traits on adolescent's friendship. It was shown by a series of researches that (1) based on the analysis of the adolescents' interpretation of ambiguous friendship figures, the affective traits which have effects on interpretation of figures would be negative affective traits rather than positive ones, (2) adolescents with lower negative affective traits tend to have positive interpretation so as to be capable of changing situations by themselves for friends, while those adolescents with higher negative affective traits tend to show the interpretation of victim mindset. These results suggest that affective traits would have a strong effect on interpretation of friendship situations, and adolescents especially with negative affection tend to take friendship-related events as victim mindset, and possibly to make it difficult to maintain friendship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	300,000	2,100,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：情動 友人関係 青年期

1. 研究開始当初の背景

日常生活で経験する様々な問題をいかに解決していくのかは、社会生活を送る上で重要な課題である。特に青年期における友人との問題は適応に影響を及ぼすことも多く、より適切な問題解決が望まれる。現在までこういった社会的文脈での問題解決は認知的プロセスを観点においた社会的問題解決理論(D'Zurilla, 2002 など)、社会的情報処理理論(Dodge, 1986 など)、または外に現れた行動を観点においたソーシャルスキルの問題から捉えられ、研究が展開されている。友人関係を含む対人関係上の問題解決もこの中に含まれ、その結果認知的メカニズムの解明や必要なスキルの選定、さらに適切な問題解決に向けての介入方法や介入プログラムの開発が行われている。

しかし実際に青年と接し、友人関係上の問題解決について丁寧に聞くと、たとえうまく対処できなかった場合でも、その後ゆっくり経過を振り返ると適切な認知プロセスを経た回答を導き出せることや効果的なスキルの選択が可能であったりする。つまり実際には対処できるはずの問題なのにもかかわらず、問題が生じた場面ではうまく対処できない事態が生じていることが考えられ、認知的プロセスやスキルの欠如だけが問題解決に影響するわけではないことが推察される。

近年、これらの問題解決に感情が大きな影響を及ぼしていることが指摘されている(D'Zurilla, 1986; Lemerise & Arsenio, 2000 など)。特に情動反応の主観的な性質(快か苦痛か)や情動的覚醒の強さといった変数だけで、問題の遂行を促進、抑制する可能性を持つと考えられている(D'Zurilla, 1986)。それを考慮すると、青年が能力的には対処できるはずの問題を対処できない場合、そこには感情が強く関わっている可能性が考えられる。例えば青年が問題を解決する際、ある主観的な感情に圧倒されると、その後の対処は落ち着いた場面での対処とは異なってくるであろう。

感情についての研究はうつ病や不安障害を持つ臨床群と非臨床群との認知処理の比較やもしくは非臨床群を対象としてある特定の感情(例えば不安)の特徴、およびそれが及ぼす影響を調査した研究が多い。現在までの研究から人は特有の感情状態への特性を持っており、その感情特性は個人に特定の感情を生起させやすくし、情報の知覚、解釈や精緻化、学習や再生などの様々な認知過程に影響を与えていると考えられている。そう

ると友人との問題が生じた際、青年の持つ感情特性が認知過程に影響し、さらに問題解決にも影響を及ぼしていくことが考えられる。しかし現在まで非臨床群を対象に、殊に友人関係に影響を与える感情特性に限定して調査した研究はほとんどみあたらない。本研究は友人関係をうまく築けない、もしくは維持できない青年の背景にある原因について、感情特性という観点からその要因を探り、青年の適応研究に新しい視座を与えることにある。

2. 研究の目的

本研究の目的は次のようになる。

(1) 青年が友人に抱く感情や感情が生起されやすい友人との葛藤場面について検討し、友人関係の維持形成に関する感情について詳細な情報を得ること。

(2) 個人の持つ感情特性について検討すること。

(3) 感情特性が友人との葛藤場面の解釈にどのように関連しているのか検討し、青年の持つ感情特性の個人差が友人関係にどのように影響を及ぼしているのか、さらにその解釈や感情が友人関係上の問題解決方略など情報処理にどのような影響を与えているのかを検討すること。

3. 研究の方法

(1) まず本研究で必要となる基礎的なデータの収集、および査定道具の開発を行う。そのため面接調査、自由記述式質問紙調査といった質的調査を主に実施し、個人一般が持つ感情特性、さらに友人関係に関わる感情、感情が喚起される友人関係場面(葛藤場面)について検討する。

(2) 次に、得られた基礎的なデータを用いて感情特性を測定する尺度の作成、および友人関係場面を設定した感情解釈図版の決定、その他使用する尺度を選定する。その際、補助的な面接調査、質問紙調査を行いながら査定道具の調整を行う。

(3) 最後に感情特性と友人関係場面の解釈、さらに問題解決など質問紙調査を中学生から大学生に対して行い、青年の友人関係とその適応に与える感情の役割について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 大学生の友人関係上で生じる感情、および葛藤場面について情報を収集するために、大学生 125 名を対象に自由記述式質問紙調査を行った。調査内容は友人関係上の悩み、トラブル・およびそのとき生じる感情、その問題の解決方法を具体的に記述するものであった。その結果、友人関係上の悩みについては“時間にルーズ”、“ヒステリック”、“人の話にすぐに割り込んでくる”など、「友人の行動に対する不満」、さらに“価値観の食い違い”、“趣味など共通の話題の少なさ”など「友人との価値観の相違」があげられた。感情としては“不安”、“怒り”、“イライラ”、“うっとうしい”などであった。またそれらの解決方法としては、“話し合う”が最も多く、互いを理解しながら乗り越えようとしていることがうかがわれた。

(2) 中学、高校生を対象に、(1)と同様に友人関係上で生じる感情、および葛藤場面について情報を収集するために、中学生 149 名、高校生 118 名に自由記述式質問紙調査を実施した。調査内容は友人関係上の悩み、トラブル・およびそのとき生じる感情、その問題の解決方法、さらに友人に対して不安を感じる時、怒りを感じる時について具体的に記述してもらうものであった。その結果、友人に対する悩みとしては“友だちがわがまま”、“人のことをあまり考えない”、“急に怒る”など中学、高校生ともに「友人の行動に対する不満」、さらに“人の悪口を言う”、“しつこく嫌なことを言われる”など、「友人からの言葉による嫌がらせ」があげられた。感情としては大学生と同様に“怒り”、“イライラ”、さらに“困る”、“むかつく”などであった。またそれらの解決方法としては“関わらない”、“あきらめる”、“話し合う”など、状況によって様々であったが、どちらかといえば、中学生は友人の「行動」については“話し合う”、“仕返す”など積極的に解決しようとし、高校生は友人の「言葉」による嫌がらせについて“話し合う”が多く、積極的に解決しようとしていることが示された。

不安や怒りを感じる時については、“話の輪に入れないとき”、“こちらを見ながら内緒話をされたとき”、“しつこいとき”、“自分勝手な行動を取られたとき”などがあげられた。

(3) 上記(1)、(2)の結果をもとに、友人との葛藤場面、さらにその具体的な解決方法についてより詳細な情報を得るために中学生(2名)、高校生(2名)、大学生(4名)、および

中学校教師(2名)に面接を実施した。そこで得られた情報をもとに、友人との葛藤場面を「友だちの自分勝手な行動に困る」、「グループでのやり取りで自分だけが入れない」、「友だちと意見が合わない」、「しつこく嫌なことをされる」、「こちらを見ながら何かを言われる」、「輪に入らず、こそこそ何かを言われる」という6場面を設定した。さらに、感情特性で使用する尺度を個別情動尺度第4版(DES ; Izard et al, 1993)、また場面の解釈時に生じる感情を測定する尺度として多面的感情状態尺度短縮版(寺崎・古賀・岸本, 1991)を使用することに決定した。

(4) (1)から(3)までの調査をもとに、まずは青年が持つ感情特性が、曖昧な図版場面(友人関係場面)を見て生じる感情にどのように関連しているのかについて明らかにした。つまりここでは、個人の持つ感情特性と場面解釈において生起される感情との関連を検討する。調査は質問紙調査で、方法は以下のものであった。対象者：大学生 107 人(男子 56 名・女子 51 名)。材料：a. 感情特性の測定：個別情動尺度第4版(DES ; Izard et al, 1993)から興味、喜び、驚き、悲しみ、怒り、嫌悪感、軽蔑、恐れ、罪悪感、羞恥心、内的反感(各3項目ずつ)の11の感情について、普段どのくらいの頻度で経験するかを5件法で測定した。b. 友人関係場面の設定：友人関係で生じやすい葛藤場面について6場面を図版で設定した。図版には表情のない(目鼻口の書いていない)人物が数名書かれている。c. 感情解釈の測定：bの図版を見て生じた感情について、多面的感情状態尺度短縮版(寺崎・古賀・岸本, 1991)から抑うつ・不安、敵意、倦怠、活動的快、非活動的快、親和、驚愕の7つ感情を4項目ずつ選定し、4件法で測定した。

その結果、感情特性の平均得点を見ると、「興味」、「喜び」といった肯定的感情、および「罪悪感」、「内的反感(自分に向けられた反感)」が高く、大学生は日常的に興味や喜びを抱く一方で、自分自身に目を向け、自分を責める感情を抱いていることが示された。また男女差については、「悲しみ」で女性が、「軽蔑」で男性が有意に得点が高かった。

感情特性が感情解釈にどのように影響を及ぼしているのかについて検討するため、各変数間の相関を求めたところ、全体として感情特性は、感情解釈の「抑うつ・不安」、さらに「倦怠」と最も関連していることが示された。不安や気がかりを表す「抑うつ・不安」や退屈さやだるさを表す「倦怠」といった感情は、様々な感情特性から導かれやすい感情であることが示唆される。一方で肯定的感情で

ある「興味」、「喜び」は感情解釈とはほとんど関連しておらず、場面の感情の解釈に影響を及ぼす感情特性は、肯定的感情ではなく否定的感情であることが示された。

(5) 次に個人の持つ感情特性が図版に表した友人関係場面の解釈にどのような影響を及ぼしているのかを検討した。調査内容や対象者は(4)と同じである。対象者は感情特性を測定後、6つの友人関係場面を見て、その刺激図版の場面状況について自分の解釈を自由に記述した。

まず、感情特性によって対象者を分類するため、個別情動尺度の11の下位尺度についてクラス分析を行い、感情特性を3タイプ(低否定的感情群、肯定否定的感情群、高否定的感情群)に分類した。その3タイプによって図版の解釈に違いがあるかどうかを検討したところ、ひとつの図版で有意な差が見られた。その結果、低否定的感情群は場面解釈として、友人に対して主体的で自ら状況を変えることが可能な積極的な解釈をすること、高否定的感情群では被害的で主体性のない解釈をすること、肯定否定感情群では主体的ではあるが積極性はなく、また被害的でもないという低否定的感情群と高否定的感情群の中庸な解釈をすることが示された。このことから感情特性が場面の解釈に大きく影響を与えていることが明らかにされ、特に否定的な感情を持つ青年は、友人関係で生じた出来事を被害的に捉える傾向があり、友人関係の維持を困難にする可能性が示唆された。

これら一連の結果は、友人関係の形成維持について、国内外であまり明らかにされていない感情との関連から検討し、感情の重要性を提示するとともに、青年の適応研究に新しい視座を与えるものである。

(6) 今後の展望

本研究の展望として以下の点があげられる。

感情特性についてより精査が望まれる。本研究からは否定的な感情特性が友人関係に大きく反映される結果となったが、肯定的感情特性についても対人関係上の状況解釈にどのような役割を担っているのかさらなる検討が必要である。

今後、感情と友人関係との関連において、場面図版の種類を変えて検討することはもちろんのこと、映像や4コマ漫画を用いるなど解釈に使用する材料の工夫が必要である。

本研究では感情特性、場面解釈図版を用いた質問紙調査を中学、高校生を対象に行うこと、また友人関係上の問題解決など情報処理と感情特性との関係についての調査ができていない。今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

榎本淳子、青年の友人関係場面の解釈に感情が及ぼす影響、東洋大学文学部紀要教育学科編、査読無、63巻、2010、23-30

[学会発表](計3件)

榎本淳子、青年の友人関係場面の解釈に感情が及ぼす影響、日本発達心理学会第21回大会、2010.3.27、神戸国際会議場

榎本淳子、中学・高校生が抱える友人関係における悩みとその解決方法、日本発達心理学会第20回大会、2009.3.24、日本女子大学

榎本淳子、大学生が抱える友人関係における悩みとその解決方法、日本発達心理学会第19回大会、2008.3.20、大阪国際会議場

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榎本 淳子 (ENOMOTO JUNKO)

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：50408952